

からたち関西

発行 / 石川県立金沢二水高校関西同窓会 2009年(平成21年)3月

VOL. 9

関西同窓会の群像

副会長 18期 棚池康信

私たちの関西同窓会(現在は金沢二水高校同窓会関西支部なのですが、どうしても関西同窓会と呼んでしまいます)も早いもので10年を過ぎたようです。私にとってこの10年間の何よりの思い出は、様々な人との出逢いです。特に創成期の同窓会を支えられていた方々との交友には思い出深いものがあります。そこで、この『関西同窓会 10周年記念号』の中で思い出深い人たちの群像を綴って見ようと思います。

群像の頂点にいるのは、現会長で関西同窓会の生みの親ともいえる中川宗之さんですが、とりあえず初代関西同窓会会長の幸村誠(5期)さんから始めることにします。幸村さんは設立準備会に集められた最長老であることから、初代会長をお願いすることになりました。できたばかりの関西同窓会はまだ方向性が定まらず、役員それぞれの胸の中にそれぞれの同窓会があるという状況だったと思いますが、役員会での議論を実に柔軟な発想でまとめられ、役員が共有するような同窓会の方向性が知らず知らずのうちに出来上がっていったように思います。元朝日新聞の記者をされていたという経歴が、柔らかなリーダーシップともいえる力量の基礎にあったのかと思い出されます。幸村さんの考えの中心は、ただただ高校時代の思い出に浸る同窓会ではなく、そこから新しい何かが生まれてくるような場をというものでした。関西同窓会がその思いを充分に実現できているとはいえませんが、この『からたち関西』はその成果であり、細々と続けられているハイキングもその一つです。最近はお会いすることもなくなりましたが、お元気でお過ごしのことと思います。

次が中川宗之現会長(7期)です。この同窓会の中川さんの精力的な活動がなければできなかったと思われます。遠く源流は神戸地区の同窓生の集まりにあったようですが、その時の人の輪を中心に、中川さん自身が同窓会名簿(からたち)の中からピックアップして手紙を出されたことから準備会の活動が始まりました。本部同窓会とも太い人脈を有していた中川さんの思いの強さに、召集をかけられた準備会役員が引っ張られるかたちで活動が動き出したというのが私の薄らぎつつある記憶です。当時中川さんは必ずしも体調の良くない中、まさに同窓会の設立とその発展に命をかけられたというのが決して大げさではない事実です。また、中川さんは三井銀行を退職されたというご経歴ですが、お堅い銀行員というイメージからは遠く、絵画を初め

として「きのこ」にいたるまでの幅広い文化的な核が人格の中心にあり、その香の高さが関西同窓会の魅力を作ってきたように感じています。このたび会長を退かれるというご意向ですが、今後ともお元気で同窓会に関わっていかれることと思っています。

3番目は直木武さん(8期)です。直木さんは最初から同窓会の副会長として、会の発展を縁の下で支えてこられました。直木さんは森総理と同期ということもあって8期全体の同期会が活発に行なわれていて、その中心的存在であったことから同窓会の運営に詳しく、関西同窓会の頼りになる番頭さんというイメージで活躍されました。何よりもその存在が貴重であったのは、役員会や総会の議事書類をきちんとファイルされ、それを毎回の役員会に持参されるので、必要に応じていろんなことを確認してくださいました。頼りない事務局にとってはまことに有難い存在でした。サンヨー電気でお勤めであったという経歴の方ですが、会社時代のきちんとしてお勤めぶりが一番感じられる方でした。高校時代は放送部に所属されていて、旧々校舎時代の苦労話を楽しく聞かせてもらったものです。また、放送部らしく美声かつ大声の持ち主で、初期の総会での締めの方歳三唱は、いつも直木さんをお願いすることになりました。直木さんもこのたび体調と家庭の事情で役員を退かれますが、時には元気なお顔を見せていただきたいと思っています。

以上のお三方が関西同窓会創成期の3巨頭ですが、初期の同窓会を女性の視点から支えていただいた方々の存在も忘れることができません。中西宏子さん(7期)、岡克子さん(8期)、菊池千恵子さん(9期)、原浩子さん(12期)の皆さんです。同窓会は総会・懇親会の当日も重要ですが、そこに至るまでの準備作業が大変です。関西同窓会はこの作業を会員自身が労力を提供してこなしてきましたが、こうした部分での女性役員の存在は、精神的な部分を含めて、とても貴重でした。また、総会当日の受付作業も、初期のころはほぼ全面的に女性役員に依存する形になりました。大変な作業を苦勞と感じさせない雰囲気が出ていたのは、明るく作業をしていただいたこの方々のおかげだったと今思い出しています。

その他、様々な人たちが同窓会の立ち上げと発展に関わってこられました。すべての方々をご紹介するわけにもいきません。名前をお出しすることのできなかった方々にも心から感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。また、10周年の総会の場合もう一度皆さんにお会いできることを心から願っています。

関西同窓会 10周年記念号



関西同窓会（関西支部） 10 年を顧みて

関西支部長
7 期 中川 宗之

平成 11 年（1999 年）11 月に、産声^{うぶ}を上げた私達の同窓会は、お陰さまで本年 10 歳の誕生日を迎えることとなります。多くの会員の皆様の温かい、ご声援とご協力に支えられ、今日まで維持、継続出来たことに深く感謝し、厚く御礼を申し上げます。

平成 19 年（2007 年）2 月の組織の改正に伴い、関西支部と名称を変更いたしました。同窓会は、一般的にノスタルジア（郷愁）と捉えられているようです。

しかし、少し見方を変えてみれば、これまでの永い人生において、それぞれに蓄積された経験を活かす、良い機会ではなかったかと考えています。

同窓会は、純粋なボランティア活動で、成り立っているといっても過言ではありません。役員や幹事さんの献身がなければ、ここまで来られなかったと思っています。

私はふとした動機から、関西同窓会設立に携わってききましたが、顧みて素晴らしい諸先輩に恵まれ、優秀な後輩の皆様に囲まれ、この 10 年人間的に、ひと回りもふた回りも大きくしていただいたように思われます。

昨年来アメリカ発の金融危機が、日本の経済に深刻な影響を与え続けています。迷走する政治、いたずらに不安を掻き立てる学者達やマスコミ、これで良いのでしょうか。どちらかという日本人は、悲観的に物事を考え勝ちですが、もっとおおらかに、鷹揚に大局を見すえて、混迷する社会に対応すべきではないでしょうか。小局を観て、右往左往するのではなく、日々悠々と前を向いて、歩いて行きたいものです。



二つのふるさと 金沢 と神戸

24 期 森 啓二

神戸に住むようになって早 33 年が過ぎようとしている。はじめは 5 年ぐらいで金沢に戻ることも考えていたが、結婚し、子どもが生まれ、いつしか神戸で暮らした期間の方が長くなっていました。

関西には石川県出身の人は多いのですが、神戸までくると、ぐっと少なくなってくる感じがします。その意味からも 10 年前に金沢二水高校関西同窓会が誕生したのは大変うれしく思ったものです。

昭和 51 年初めて関西に出てきたときの最初の印象は、大阪の人の多さと、その人たちが皆せかせかと歩いている姿でした。なにしろエスカレーターを多くの人が歩いているのです。そういう私も今では同じようにエスカレーターを歩いているのですから、すっかりこちらの人間になった、ということなのでしょうね。

生活様式はともかく、言葉なまりは 33 年たった今でも残っているようで、関西生まれの人と話していると、「森さんはこちらの生まれとは違うようですね。どちらの出身ですか」と聞かれることがあります。そんな時「石川県、金沢の出身です」と答えると、間違いなく「金沢ですか。良いところですね」という返事が返ってきます。そんな時は内心ニコツとしています。

「金沢と神戸の違いはなんですか」と時々聞かれることがあります。「金沢は寒い」とか「雪が多い」とか「加賀百万石の伝統文化が息づいている」とかが、普通の説明でしょうが、私は神戸は「朝日のまち」であり金沢は「夕日のまち」である、とかつてに思っています。

北陸の人は夕日を見ながら、次の朝までものごとを考える余裕があります。その分、北陸や金沢のほうがゆっくりと時間が流れているような気がします。変化が遅いということかもしれませんが、私はこのほうが人間のペースにあっていると思っています。

昨年 8 月久しぶりに中学校（私の母校は小将町中学校といっています）の同窓会に出席しました。中には 40 年ぶり会った同窓生もおり、名札を見ながらでない外見からは思い出せない（私もその一人ですが）人もいました。しかし、話をしているといつの間にか 40 年前にタイムスリップできるのが同窓生の良さだと思っています。

ご高齢にもかかわらずかくしゃくとされている先生方、が

おられた反面、各クラスの名簿のなかに3～4人亡くなられた方がおられたり、かなりショックを受けました。改めて月日の流れとともに自分の歳を思い知らされた気がしたものです。

最近金沢に帰ることも年に1回あるかどうかになってしまいました。しかし、今でも金沢の地を一步踏みしめると、ホットした気持ちに包まれます。金沢も日々変わっており昔のままではありませんが、町の空気というか雰囲気はそのままのような気がします。何年離れていても金沢は私にとってのふるさとです。

一方、金沢から神戸帰り、淡路島や明石海峡大橋が見えてくると「ああっ自分の家に帰ってきた」と思いますから人の気持ちは不思議なものです。

そんな時、私には「金沢と神戸という二つの故郷があるんだな」という思いを強く感じます。故郷が二つあるということは、ずいぶん贅沢なことだと思います。この二つの故郷をいつまでも大切にしていきたいと思っています。



二水時代にお返し

26期 中村 智

金沢から大阪へ転勤となり、早や19年が経ちました。これまでの間を思えば、子供は大きく成長し生意気になり、未曾有の大地震ではガス臭の漂う街を駆け抜け会社へ急ぎ、また、東京での単身赴任も経験させられ、気が付けば五十路を超えた普通の「オジサン」になってしまいました。退職後は即座に金沢へ帰りたいという私の希望とは裏腹に、家族はいつまでもこの関西の地を謳歌するが如く居座るつもりらしい。それぞれが描く生き方は結構だが、死ぬ時は金沢でと決心している私が、ここでさらに譲歩すれば、死んでから金沢に送り届けられるようで、少々心配になりつつある今日この頃です。

さて、これを書いている今は3月13日夜、JRのダイヤ改正前夜です。寝台特急「富士・はやぶさ」が廃止になるということで鉄道ファンに限らず、利用した人達からは別れを惜しみ、労をねぎらう声が聞こえています。同じように、昨年11月には0系新幹線が姿を消しましたが、その時の報道は世界各国へも発信され、一大ニュースとなりました。映画「おくりびと」も高い評価を得たようですが、最近の殺伐としたニュースが多い中であって、私たちは大切なものが消え去ることに対する「哀愁」を素直に、しっかりと感じ取っていると受け止めています。

バブル経済が崩壊し、長い景気の低迷からようやく明るい兆しが見えてきたところに突然襲ってきた世界的な経済の後退。しかし、多くの日本人は欲しいものがないと言わ

れているように、ものに溢れた生活をしています。先の現象は、高度経済成長期にはみられなかったことではないでしょうか。至極当たり前のことだと思いますが、お金では買えないものに対する価値観が一つの世相となって映し出されていると感じています。

その日本経済が凄い勢いで発展している最中に私は二水に通いました。初々しい1年生の時、体育祭では女子の競技に男子が途中から侵入。文化祭が終わった後は、上級生が卓球台に上がり「戦争を知らない子供たち」などのフォークソングを歌い始めると、その周りを生徒が囲み一緒になり、夜遅くまでずっと歌い続けていました。ああこれが二水高校かと驚いたものです。これらは二水の自由な校風だからこそ許されたのでしょう。親しい友も二水でできました。お金では勿論買えない、失いたくない私の財産は二水から多くいただきました。

そんな二水に恩すら感じている私が、大変申し訳ないことに、最近になって初めて同窓会のお世話のほんの一部を手伝わせていただいています。準備で毎回集まる幹事の先輩方は日頃とてもお忙しいであろうに、自分の時間を割き、一人でも多くの同窓生に声をかけよう、会を盛り上げようとしています。同窓会関西支部の創設から携わり、これまでの10年間のご労苦に頭が下がる思いです。五十路を超えた普通の「オジサン」としては、とても気恥ずかしいのですが、大切な二水時代にお返しをするつもりで、これからは先輩・後輩のお世話のお手伝いが出来ればと思っているところです。



我が家の宝物

18期 小竹 正幸

我が家には今二匹の猫が同居しています。どちらも元は野良のメス猫で、年上の方が柚子、若い方が伊都。柚子は12、3年前からマンションに居つき、8年前の年末の早朝怪我をしてうずくまっているのを見つけ引き取った子です。伊都は4年前家内がお客さんの家で、崖にいる子猫たちを捕らえようとしたときに、その中の一匹を誤って崖下に落としてしまい、それから我が家で育てた子です。お客さんの家が伊東さんだったので伊都と名づけました。

我が家の初代の猫はくーにゃん。中国への出張の朝アパートの前に捨てられていたメスで、ジョギングから帰ってみたらすでに我が家の一員となっていました。

見つけたときはずいぶん汚い子だな思いましたが、会社から帰ってみると見目麗しい美女に変身しておりました。くーにゃんと命名。本人は不満だったでしょうけど。

1989年から約6年間グアム島に住み、最初の数ヶ月は単身

赴任をしておりましたが、ある日家内と一緒に住むと電話をかけてきました。その日以来くーにゃんは姿を消し、もう二度と私どもの前にあらわれることはありませんでした。まるで神隠しにでもあったような感じです。

後に母親から聞いた話だと、家内がその年の正月をグアムで送るため金沢の実家にあずけたのですが、毎日玄関先にたたくみ帰りを待ってたとのこと。動物の感で何かを感じとったのかも知れません。

赴任した当時アパートには黒猫が住み着いており、ある日足を折って動けなくなっているのを見つけてそれから一緒に住むことになりました。名前は美伊奈と付けました。これが2代目。そのとき美伊奈は妊娠をしており、その後6匹を産み我が家には2匹残りました。それが3代目千馬(オス)と4代目千穂(メス)です。

千馬はその後ベランダからトンボをとろうとし(その当時黒いトンボが沢山飛んでいました)落ちて亡くなり、六ヵ月後今度は千穂が落ち、幸い命は取り留めましたが下半身不随となりました。

1995年親の美伊名と娘の千穂を連れ帰任しました。その美伊奈も長生きの末3年前に亡くなり、半年後千穂もあとを追うように逝ってしまいました。

2年前の7月に蓼科にある知人の別荘を借り柚子と伊都を連れ旅行したときのこと。柚子があまりにも外に出たそうにしていた(すくなくとも私にはそう思えました)ので戸を少し開けてやったところ藪の中に入り込んでしまい戻ってきませんでした。何度呼んでも応答がなくその日はあきらめ明日に期待し寝ようかなと思ってたとき、かすかに声が聞こえたのでテラスに出てみましたが、その声もだんだんと遠くなり聞こえなくなりました。なぜかしら私には「パパ ママ ごめん! わたしここがいいの!」と言ってるように聞こえました。

あの臆病な性格からして呼んだら必ず帰ってくるはずなのですが返事をしないなんて。それからというものの週末はほとんど蓼科で時間を費やしました。

秋も深まる頃地元に住むあるおばあちゃんから連絡が入り現場に向いました。現場は別荘から2キロほど離れた人気のない小屋でその小屋の玄関口に柚子がたたずんでおりました。そと「柚子」と声をかけましたが私どもの顔を見るなり軒下に入り込んでしまい、それっきり何の応答もありませんでした。気配を全く消した感じでした。

蓼科は関西とは冬の到来が一ヶ月早く9月末ともなるとかなり冷え込みます。それからというもののいろいろインターネットで調べ、ようやく捕獲器というものの存在を知り、さっそく取り寄せ再度蓼科に向かいセットし翌朝に期待をつなぎました。早朝現場へ行き、恐る恐る木陰から覗いてみると捕獲器の中にうずくまっていました。抱き上げたときのなんと軽かったこと。

当の本人は今ではそんなことがありましたっけという顔で人の顔をみるたびに食べ物の催促。おかげでもとの肥満児に逆もどりで。

この2月、美伊奈と千穂が亡くなってから3年になりましたのでグアムを訪れ、千馬を埋めたあたりに二人の骨を戻しました。

千馬には寂しい思いをさせてしまったことを詫び、とともに3人にはいい思い出を与えてくれたことにありがとうと手を合わせました。



ひらがな六つ

18期 河本 富子

二水の同期生で関東在住のH君には、現在イタリアのフィレンツェで仕事をしているR子さんというお嬢さんがおられます。うちも娘がドイツにいるものですから、もしかしたら若い二人がヨーロッパのどこかで出会う機会があるかも…と想像していた矢先、年末年始をフィレンツェで過ごす予定だと娘から電話がありました。早速、その事を関東のH君に伝えて、お互いに遠く離れた4人が電話やメールで連絡を取り合った結果、二水同期生ジュニアの二人がフィレンツェで初対面となりました。楽しい話題がいっぱいの素敵な時間を過ごしたと聞いて、R子さんのお父さんH君との出会いを思い出しました。私にとって、それは忘れ難い大切な思い出なのです。

実を言えば数年前まで、彼も二水出身だとは知りませんでした。関東の同期生から彼の名前を聞いて、(えっ? ああH君も二水だったのか)と感無量でした。彼との初めての出会いは昭和20年代までさかのぼります。私が金沢市の味噌蔵町小学校に入学したのは、今から半世紀以上前のことです。クラスは1年1組で胸に着けてもらった名札は桜の花の形でした。さくら保育園に通っていたから桜の名札、そう思い込んで教室に入ったら、何と生徒全員が桜の名札です。こんなに大勢さくら保育園にいたっけ?と思ったものです。季節が春だから新入生の名札もさくらの形、そう気づかなかったのです。担任の池田久子先生が男子と女子をペアにして二人がけの机に着かせました。私の隣に座ったのはキリッとした賢そうな男の子でした。その子の名札に書いてあるひらがな6文字を忘れないように覚えました。

やっと文字が読めるようになったばかりなので、そんな風に人の名前を覚えたのは生まれて初めての経験でした。席が決まったと思っていたら、池田先生はもう一度皆を教室の後ろに一列に並ばせて、身長順に男女1名ずつを組み合わせて前から順に座らせました。キリッとした男の子とは席がバラバラになりました。必死で覚えたその子の名前を、今度は先生が大きな声で読み上げて、この組の学級委員ですと言われました。それがH君だったのです。小学校時代の事は殆ど忘れた今でも、鮮やかに思い出せるのが不思議です。H君、関西にまたいらして下さいね!